

「縄文時代の、とあるムラの日常」
—伊達市北黄金貝塚—

伊達市教育委員会
学芸員 永谷 幸人

史跡・北黄金貝塚は、北海道の南西部、噴火湾に面した丘の上に位置する、縄文時代前期（約6,000～5,000年前）の大規模な貝塚を伴う集落遺跡で、世界遺産の国内推薦候補に決定した「北海道・北東北の縄文遺跡群」の構成資産のひとつです。

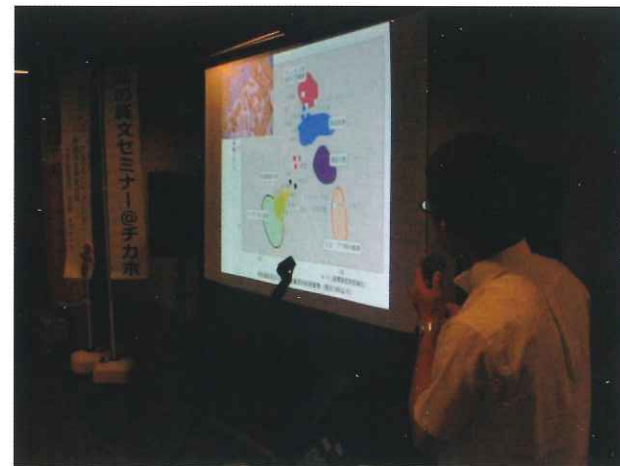
北黄金貝塚では、5カ所ある貝塚の位置や、その中から出土する動物の種類から、環境の変化とそれに適応した縄文人の暮らしの様子が分かります。具体的にいうと、縄文前期前葉につくられたB地点貝塚は丘の一番高いところにあり、中からは温暖な海を好むハマグリが多量に出土します。それが前期後葉のA地点貝塚では海寄りの場所に移動し、中からはカキやホタテ、ウニが多く出土するようになります。気候が温暖で海水面が高かった「縄文海進」と呼ばれる時期から徐々に冷涼化していった過程と、環境にあわせて利用する資源を変化させていった縄文人の暮らしぶりを貝塚が表しているのです。

また、貝塚が神聖な場所であったことが分かることも、北黄金貝塚の特徴のひとつです。C地点貝塚では、シカの頭骨を集めた儀礼の痕跡が見つかりました。また、A地点貝塚の中や下からは、14基の墓が見つかり、貝塚がただのゴミ捨て場ではなく、墓地的な要素も持っていたことを示しています。北黄金貝塚では、この他にも役目を終えた礫石器の廃棄儀礼が行われたと考えられる「水場の祭祀場」などが見つかり、縄文時代の豊かな精神文化を知ることができます。



▲ドローン空撮風景（北黄金貝塚）

こうした遺構が北黄金貝塚に残されたことの意味を考えてみたいと思います。北黄金貝塚では、全体の発掘が行われているわけではないので、正確な数はわかりませんが、同時に存在した住居は4・5軒程度、人口にすると30人前後の、とりたてて大きな集落ではなかったと推測されています。いってみれば、「縄文時代のふつうのムラ」である北黄金貝塚に残された巨大な貝塚や豊かな精神文化を示す遺構は、縄文人にとっては当たり前のものであり、「数百年にわたって積み重ねられた、とあるムラの日常」といえるのかもしれませんが。



縄文トピックス

チカホにて「縄文夏まつり」を開催！
4日間で約1万人が来場！



7月25日から28日までの4日間、「縄文夏まつり」を開催しました。人通りの多い札幌駅前通地下歩行空間（チカホ）での開催だったこともあり、普段は縄文文化に触れる機会の少ない方々にも興味を持っていただき、イベントは大きな盛り上がりを見せました。4日間でおよそ1万人の方々が来場され、縄文文化の魅力を感じていただきました。

展示品解説ツアー



▲国際大学縄文世界遺産研究室の越田室長による
展示品解説ツアーのようす

北の縄文セミナー



▲連日満席で大盛況だった北の縄文セミナー

縄文ワークショップ



▲子供から大人まで楽しめる縄文ワークショップ



▲ミニチュア土器づくりのようす